

令和元年度 地域貢献事業活動報告書

1 事業名称	上越子ども支援プロジェクト
2 事業推進者等	責任者：助教・宮崎 球一（心理臨床コース） 実習者：学部生・大学院生（臨床心理学コース宮崎研究室所属） 顧問：佐藤 賢治（上越教育大学） 共同実施者：岡田 まりあ（上越市すこやかなくらし包括支援センター・臨床心理士）
3 学外の連携機関等	連携機関：上越地域の小中学校（本プロジェクトは、学校からの支援依頼に応じて小中学校と連携し活動するものである。
4 事業の趣旨・目的	本事業は、上越地域の小学校と中学校において、学習面、生活面、社会面に関して、学校生活で困難さを抱えている児童生徒に対して、臨床心理学コースの宮崎研究室に在籍している学部生・大学院生が、心理的支援を実習者として提供することを目的とする。また、責任者も学校からの要請に応じて学校でコンサルテーション等を実施し、実習者の指導も並行して行っていくものである。実習者は学校臨床の仕事に携わることが希望していることから、学校で継続的に児童・生徒の支援を行うことで、心理職として働くための訓練となっている。また、支援対象の児童生徒はもちろん、学校側にとっては子どもの支援の選択肢を拡げる機会となっている。
5 事業活動報告	令和元年度は、上越地域の中学校2校、小学校3校の計5校から依頼を受けて活動を行った。実習者の活動頻度は、年間通して毎週1回程度（1回の活動は半日から1日）であった。支援を行う実習者は、対象児童生徒が在籍するクラスで過ごし、1日一緒に活動を行った。その中で、環境調整や子どもへの声かけを中心とした支援を行い、その場面において適切な行動を促進させるはたらきかけを行った。 本年度の依頼は前年度からの継続依頼が多く、責任者と学校側とでまずこれまでの支援の経過を報告し、今年度の支援をどのように進めていくのかを話し合った。次に、今年度の実習者の具体的な活動内容について検討し、実習生の挨拶を行った。その上で、年間を通して学級における支援を実習者と責任者が進めた。また、学内では定期的に実習者の指導を行い、支援の効果が高まるようにアドバイスを行った。 さらに、学校からの依頼に応じて、責任者自身もコンサルテーション及び生徒の支援と、小学校全体を対象にした支援を行った。

<p>6 本事業で得られた成果</p>	<p>本事業の成果を、学生の実習と、対象児童生徒の支援に分けてまとめる。まず学生の実習としては、心理学的な支援方法の1つである応用行動分析学を中心とした実際を、実地で学ぶことができた。応用行動分析では行動と環境の相互作用に注目するため、特定の枠組みに基づいた観察や記録を現場で徹底して繰り返す訓練が必要であり、観察された行動と環境の関係性に関する分析に基づいて支援を行う。大学で行われる通常の実習では、年間を通して毎週徹底した行動観察の訓練を行うことは非常に難しいため、本事業では全国的にもほとんど見られない高度な訓練ができています。実際、実習者の行動観察記録や学校側からの報告から、活動した学生のスキルがこれらの訓練によって向上していることが確認された。</p> <p>次に、児童生徒の支援については、行動や情緒面においてポジティブな変化があり、その場面において適切な行動をとる頻度が増えたことが報告され、支援の効果があつたと考えられる。実施校のうちの1校については、学年全体への支援によって児童の社会的相互作用が促進されることが示され、この成果は令和2年度内に実習生が学会発表する予定である。また、実施校のうちの1校で、責任者が小学校全体を対象として行った支援については、2019年度に日本学校メンタルヘルス学会で発表を行った。</p> <p>以上の成果から、引き続き支援を行ってほしいといった要望や、中越地域の学校からの支援依頼などもあり、本事業で得られた成果をもとに活動をより知ってもらうことに広がっている。また成果を学会で発表することも今年度から開始しており、活動をより広く周知することができるようになってきた。</p>
<p>7 その他 (成果物等の名称)</p>	<p>本事業は令和2年度も継続して行う予定である。また、上越地域の小中学校に加えて、中越地域の特別支援学校からも依頼があるため、責任者のコンサルテーションの活動範囲を拡げる予定である。</p> <p>・宮崎球一 (2020). 小学校におけるスクールワイド・ポジティブ行動支援の導入 日本学校メンタルヘルス学会第23回大会</p>